

## 第2回研究実践奨励賞



◆受賞のことば◆

### 認知症ケアの現場から考える課題 ～“いのち”を生きる姿から～

林 和秀

(コミュニティ福祉学研究科博士課程前期課程)

第2回研究実践奨励賞を賜りましたこと、心から嬉しく、大変光栄に存じます。研究者として未熟な私が投稿をするにあたり、ご指導下さった指導教授の長倉真寿美先生、そして貴重なアドバイスを下さった先生方に深く感謝申し上げます。

私は、本学コミュニティ福祉学部福祉学科を2010年に卒業し、認知症グループホームでの介護主任、管理者を経験しました。そして昨年、介護職として働きながら本学研究科の修士課程で学んでいます。

現場で働いていることで多くのことを学び、また介護・福祉の業界に足りないことも分かってきました。私が関わったホームに、長年一人暮らしをされてきたAさんという80代の女性がいました。食事はホームで作って一緒に食べていたのですが、入居して暫くは毎日必ず、昼食後、少し経つと「ご飯ちっとも食べて無いだよ!」と訴え、買い物に行こうとされます。お金が手元に無くなると強い不安を持たれるので、数千円は財布に入っていました。一緒にお茶を飲む、時には一緒に買い物へ行くなどで対応をしていたのですが、ある日、昼食の片づけが終わった頃にAさんの姿が見当たらないことに気が付きました。家族や警察に電話した矢先、ふと「ピンポン」と玄関のチャイムが鳴ります。ドアを開けるとそこには、普段はシルバーカーを押して歩いているAさんが、買い物袋を二つ両手に持ち、「おう! 疲れたー」と清々しい表情で笑って立っていました。

認知症の方が織りなす言動は、社会で他人との共通認識の中に生きている人にとっては不可解に映ることが多いですが、Aさんからは、認知症の方が他者の認識とのズレを持ちながらも、自らの“いのち”を精一杯生きようとしていることを教えていただきました。もちろん、Aさんの清々しい表情は大きなリスクを伴うことであり、事故として捉え再発を防ぐ手立てを考えなければなりません。しかし一方で、ホームとして毎日買い物に行き、食事を作り、施錠をしない環境にしていたから生まれた可能性であったとも言えます。

グループホームに入居するという行為は、「生活」を一から構築する作業を伴うものですが、それを決める施錠の有無や食事への支援といったケア環境が、事業所ごとに大きく異なっているのが現状です。こうした状況は、ケアの現場において介護職の側が認知症の方の生きる姿をどのように捉え、そして支えるのか、ということの議論が不足していることの現れであると考えています。

まだまだ研究の道のスタートラインにも立っておりませんが、今回の受賞を励みに、認知症の方の生活がより良い方向へ向かう議論の発展の一助となるよう、今後も研究に精進して参りたいと思います。